

川と技術と住民

川の固有名詞を取り戻すために〈インタビュー〉

宮村 忠

編集部 宮村先生は、七代目の江戸っ子

として長い間隅田川を見つめていらした上に、最近では隅田川クラブの会長さんとして、流域住民と川とのかかわりの回復を求めて活動していらっしゃると伺っております。都市の中の川の再生は非常に困難なこととは思いますが、そのような活動を通しての経験や土木を専門とされているお立場から、都市の中の川のある方、近代の土木技術のあり方等についてお感じになっていることをお聞かせ頂けたらと思います。

まず最近の隅田川の様子はどのようにでしょうか。

一——固有名詞としての隅田川の復活

宮村 隅田川にだけは水上バスがありま

す。五、六年前まではこの水上バスに乗る人がいなくて、廃止の話がでていました。最近、観光客が年間六〇万人も乗るようになりました。さらに、外国人が六万人も乗る。この外国人の数は京都のお寺に次いで多いのですが、なぜ外人が乗るかという点、東京へ来てほんとうに東京を見ようとするとサンシャインビルや新宿だけではなく隅田川をみようとすると。我々がバリに行つてセーヌ川を見

ると同じです。隅田川をみるなら水上バスとなるのですが、その人たちが船に乗ってみると、まず何も見えない。見えるのは刑務所の塀のようなものだけです。彼らにとってはそれが東京になる。それは日本人がいかにエコノミックアニマ

ルであるという印象を与えているように、彼らにとってはそれで良いのですが、我々、日本人から見ればまことに具合が悪い。このことは我々が固有名詞の隅田川というシンボルを捨ててしまったことを意味しています。

隅田川は、江戸、東京のシンボルになる条件があった。その成立過程から現代までをみるとシンボルなりの人とのつながりがあったわけです。戦後、防災が決め手になるのですが、伊勢湾台風を契機として一べんに刑務所の塀みたいな護岸ができた。防災マンションなどもできて、新しい人も含めて刑務所の塀のような護岸で取り囲まれ、隅田川を見る目が変わってきた。それは固有名詞のついた川ではなくただの川。そして、住んだら

- 一——固有名詞としての隅田川の復活
- 二——隅田川と景観
- 三——近代技術の反省
- 四——蛇口文化の中の川

前に川があつてそれがたまたま隅田川だという人にとっては、汚なくて悪臭を出す川となると蓋をしてしまえ、という意見になり、現実には蓋をして高速道路にしろという計画が住民のアンケートを土台にしてでてくるのです。住民史がない人がその地域の将来構想を考えるとそういうところから出発する。住民史がある人はなぜそうしちゃったのかをフィードバックする。そうなったこと、そうしちゃったことを問題にする。そこで隅田川を見直そうということで隅田川を考えてみた。そうしたら刑務所の塀のように目隠しにした途端に川が汚なくなつて、花火もやめボート屋も存在できなくなつたことがわかった。今では、川と接するのは橋の上を通過する時だけで、川が通過地

点であるだけになったら川はだめになった。これはどうにもならないという状況が一方にあって、一方で東京のシンボルだといわれるどうも困ったという話になる。

子供を川に入れる

そこです、川にみんなを引き戻そうということになって、刑務所の塀を乗り越えて、まず川に入ってもらおうと試みた。すると水上バスが混み始めた。まっ先に川に入ってもらったのは子供達なのですが、川沿いの小学校の校歌には全部隅田川が入っている。子供達は実際の隅田川は知らなかったが、行ってみてこれが校歌にでてくる隅田川なのだ、という実感がでる。そして家族をさそう。すると家族にも実感がでてくる。親も不景気になって金のかからないところをさがす。それから高速道路や地下鉄などの工事で川をかきまわしたのでヘドロがなくなり悪臭がしなくなった。そういう条件がたまたま重なって人が川へ近づいてきたんです。そうしたらおもしろいことに、まだ汚なくても固有名詞の川、隅田川に戻ってきた。刑務所の塀を何とかしろ、という意見が出てきて、行政もそういうところを目ざとくて降りられる堤防をつくろう、花火をやらう、人が渡るだけの橋をつくろうという話がすんだ。

そういうイベントを中心に川に人を呼び戻すことをやってきたのです。おもしろいことに、少しきれいになると、川を埋めようといっていた人たちが、もったきれいにしたいと思う。住民史のある人たちはまだ汚ないけれど何とかなるという希望が湧く。一度希望をもつと、希望がどんどんふくらんでくる。

瀕死の状態からの回復

編集部 隅田川というのは大きくて小手でいじれないという面があるのでうまくいったのではないですか。

宮村 それだけに、関東大震災の帝都復興事業や高度成長期でもの凄事業をやったわけです。そういう面では事業の対象となり一変させられたわけです。高度成長期に固有名詞を失ったが、簡単な事でひっくり返ってきた。そういうことはどの川でもあり得る。横浜の人に話をすると隅田川だからできたのだ、というがそうではないと思う。隅田川はもう万歳していたんです。ところが、何か光明を見出だすとワッといく。光明というのは住民史ができてくることでもあり、住民史のできた人がいると希望もでてくる。

象徴的なのは花火でした。一〇〇万人ぐらい人が集まる。それだけ人が集まるのは花火が素晴らしいのではない。見るとたってビルが多くて見える場所が少な

い。たまたま、最初にやった時、本部を吾妻橋の、あるビルの屋上に作り、華やかな舞台をしつらえ、都議会の議長以上や都庁の局長以上しか入れないとかの貴賓会場を設置したのですが、いざ始まる前が高速道路で見えない。それくらいひどいのです。見えるところもないのに人が集まるのは、隅田川という固有名詞が復活したからです。隅田川の花火をみる、長い人とのつながりのあかしがあり里帰りをしてくる。そして、小学校時代のクラス会があちらこちらで開かれる。そこで話題になるのは、やはり、ここで遊んだ、という思い出です。ところが自分たちの子供をみると児童公園で遊んでいる。児童公園には里帰りしない、それをどうするんだろうという話ができる。役所にはこれができない、技術的にできないというまいと人々の意識が向きだした。ただ心配なのはブームだと困るのですが。

川は流域住民の顔

隅田川は都市河川の象徴でして、上は新興住宅地がどんどんできて、下水はない、ゴミはほとんど捨てられなくなり、ゴミはほとんどないです。子供が見に行くとなるとゴミは捨てられ

どゴミがないのでほとんど動かしてないですよ。隅田川は行政だけのものではなくなりました。「刑務所の塀」を作った高速道路を作ろうという話の時には川は行政のものですよ。周辺の環境整備としてもっと行政がやれよ、という話しか出なかった。住民が自からゴミを取ってというのはそうではない。自分の顔だ、という意識です、もともと隅田川でいろいろ考えようといった時に一番規定したことは、川をこんなにしたのは東京都が悪い、建設省が悪いとかいう人はやらないでくれ、といったんです。川というのは流域に住んでいる人の顔なんです。人相と同じように河相があるとすれば河相は流域に住んでいる人の生活の仕方を素直に表わしている。自分の顔をきかないまま置いておく人もいないだろうし、みっともないと思っても誰のせいでもない。自分で顔を洗おうということになります。自分できれいにしようという人だけ集まってくれ、というキャンペーンをはったんです。自分の顔に責任をもつ人が隅田川について発言しなさい、というキャンペーンです。

二——隅田川と景観

震災復興の橋

編集部 一般的にみると都市の中の川に

は水面まで降りるといふ生活がないわけですが、隅田川の場合震災復興の時に橋の設計をした人が、水面から見るとこのデザインのかかり意識してつくった、ということですが、橋を下からみるということは、今ではなくなっていますね。

宮村 隅田川に新大橋という橋がありまして数年前にかけかえたのですが、その時、古い橋の橋台に作った人の碑があった。設計者など四、五名の名前が連らなっている中にデザイナーの名前が書かれております。デザイナーが設計者と同じラックにきちっと入っているんです。隅田川では一三の橋が震災復興の後に架けかえられています。全部形がちがっていて鉄で作った近代橋梁の曙なのです。その時に作った人たちのことを調べてみると、非常にデザインに気をつけています。橋の上からみた景観、兩岸からみた景観、水面からみた景観、少しさがって町からみた景観、全部考えてやっています。震災復興の時期というのは、日本の土木ブームの中でも高度成長の時と同じような大変な時期なんです。その時に画一的な物を作らなかつたということは大変重要なことだと思えます。今の技術屋の物を作りさえすれば良いのだ、という姿勢に対して良い反省材料になりますね。戦後の土木屋というのは画一的な

の一本で、ある面で技術を進歩はさせましたが、計算にのらないことを全部無視してしまつた。そうでないとスピードを上げて進歩しないところはあるんですが、その辺でも今の時代の不安感を感じます。

震災復興の時、昭和十年に藤牧義夫という版画家が描いて、この人が一年かかって隅田川兩岸絵図を描いたんです。百メートルを超える巻絵で、墨でかいた見事な絵です。彼は絵を描いたのにすごい貧乏をしたのですが、描き上げた途端行方不明になってしまつた。そのままその日が命日になってます。その絵は葛飾北斎の絵を命題に描いているのですが、おもしろいことに、所々にこの風景がなくなるんじゃないか、という心配が書きつけてあるんです。昭和十年という土木工事の最盛期にあたるのですが、その時やった土木工事では藤牧の危惧は幸わいにも成就しなかつたんですね。新らしい橋が見事にマッチして地域の名物になったんです。ところが危惧が当たつたのが戦後なんです。彼は風景が進化するかどうか、という発想をしている。人間が何かをやる時に、そのことよつて風景が変わるんだ、それを意識しているかどうかで風景は進歩もするし死にもする。戦後はどれひとつとってもさまにならな

三——近代技術の反省

近代技術の評価対象

編集部 さまにならな

いということか周
辺住民のかかわりを断つていく。無関心

心を加速していくわけですね。
宮村 技術屋の評価というのは、そこに作つたものからスタートするんです。昔の橋と比べるとか、今までの生活とのパランスとかの話ではなく、その橋の安全性とか、色が良いとか悪いとかからしか出発しない。近代技術の姿勢というのは、今までのマイナス面、つまり材質が悪いか、危ないとか、よく流されるとかをプラスにして評価する。ところが、前のプラス面をマイナス面にしてしまふ、というのも一緒にやつてしまふ。前のプラス面をプラスにしたままマイナス面をプラスにするというのが技術の進歩のはずなのですが。前のプラス面をマイナスにすることで前のマイナスをプラスにする。プラスにした方だけを評価の対象として、マイナスにした方を評価対象にしない。隅田川でも同じことで防潮堤を作ることで高潮災害に対してプラスにしたのですが、今までの住民と川とのつながりはマイナスにしたわけですね。どちらも評価対象にしなければいけないの

にやつた工事の目的だけを評価対象にして、他のものは無視するわけですね。これで成り立つてきたのが都市の構造物なんです。それが今、問題になってきた時代でしょう。構造物が住民と「もの」のかかわり合いを遮断したわけですね。昔、日本堤、隅田堤が隅田川の上流の方に堤防としてあつた。ここは桜の名所、日本堤には堤防がなかつたんです。江戸の拠点防災施設が実は名所だつた。遊ぶ場所でもあつた。ところが、今、よく相談されるのは防災が環境か、という二者択一の話でして、合わせもつ検討が全くされていないんですよ。

技術の本音と建前

役所の工事をみると目的が書いてあり、目的だけ考えれば評価の対象は決まつてしまふ。行政の人には酷かも知れませんが、日本の場合には目的のはつきりしているものはほとんどない。中世からの川をみると、何のためにやつたかわからないものが多い。今でもわからない。ほんとうは利水なのに治水といわなければできないものはありますからね。ちがうところにも目的があり、本音と建前の使い分けというのは土木にはつきも

のなんですよ。本音をいってしまったらできない土木工事もあるんですよ。だから建前で勝負していく、ある意味で本質的に土木にそなわっているものなのかもしれないですね。たとえば、今必要ではないけれど五〇年後に必要となるからどいてくれ、といつてもどいてくれないでしょう。だけど今やらなければ将来はできないとしたら建前として今必要だからというものとしてやっていく以外に仕方ないことがいっぱいあるわけです。隅田川でいえば震災復興の時には本音と建前を技術屋が最低限知っていたのです。今の技術屋というのは建前を本音だと思つている。そこが非常に墮落なんですよ。技術屋の最低限の良心というのは本音と建前をきちっと知つてることなんですよ。ところがそれが残っていかない。

編集部 本音の部分をどう若い人、後世に伝える、あるいは残していったら良いか問題なわけですね。

宮村 これは日本の文化の特徴だと思つたのですが、歴史家の判断する材料は文献、資料なんです。ところが資料は寺がなければ残らない。資料があるから何かがあった、ということではない。つまりほんとうに何かがあったら資料は残さないかもしれないわけです。古島敏雄さんという人が『土地に刻まれた歴史』というのを書きまして、これは歴史家に対する

強烈な批判だと思つたのですが、土地を見ればその歴史が考えられる。ところが、歴史家は文献がないと考えられない、と書いています。

日本で一番人間が川を動かしたのは利根川とか北上川とかですが、文献からみてももちろん、川の形をみても、これはほんとうのことをいうと目的がわからないのです。推定しかできない。今やつてある川の改修を百年後に評価しようと思つたら建前しか書いてないのでわからない。本音と建前の議論がこれくらいになつた時代は少ないんじゃないですか。しかも工事は莫大になつてきたという恐ろしい時代です。ある指標を置けば技術屋が建前で動かされる時代になつてきた。

編集部 川の改修でいえば治水が目的というのは誰もがそう思つているし、実際に改修のすすんでいるところは浸水してないし聞いていますか？

宮村 全く改修したことによって効果がないとはいえないですよ。効果はあるけれど、一番のねらいはそうではない、というところはいろいろあるんです。たとえば日本の川でダムを作りますね。多目的ダムとか皆治水が入っています。もし治水が入つていなければどういうことになるかという、負担がふえるので、皆べらぼうに高い水を飲まなければいけ

なくなる。費用をふり分けなければいけないから。これは普通の人の経済力では飲めないものになつてしまします。それからダムを作るために立退きをする人から考えた場合、横浜や東京の人たちが飲むためにどいて下さいとはいえないでしょう。不特定多数のための安全性とかいうことになる強制執行も成立つわけです。説得しやすくなるわけです。土木工事は本音をいえない、という面もあるわけです。それをいかん、といわれたらこれは困るんです。

ものづくりへの反省

宮村 社会の感じがちがってきて、土木の迷いの時期だと思つているのは、今まで橋をつくる堤防をつくる、道路をつくる、港をつくる、鉄道をつくるとかは反対されたことがなくそのものは善なのです。たまたま立退く人がいやだということとはあつても、その人でも作ることは悪だとは思つていなかった。ところが、四十年代後半から、道路をつくるのは善か、堤防をつくるのは善かと問われ出した。それに答える訓練を土木屋はやってない。土木屋の使命はものを作ることで、**「国土を生かす知恵」**などというキャッチフレーズが学会の標語だった。それが四十年代後半から**「国土を滅ぼすバカ」**なんていう標語に変わる可能性もあつた

んで、ともかく、堤防作るのがどうなのか、ダムが必らずしも良くないと問われた時に、どこで検討したら良いか、戻すべき原点がないんですよ。しかも土木屋の内部から問いかげがきたのではなくて外部から問いかげがきて受け答えできない。だけど力は強いんです。その辺のギャップをどう考えるのか。原点の置き場所がないので困つてるわけです。困つてのだけどひとつだけ方法があるのは、現状をつくつたのは何なのだろうか、というのを考えてみよう。すると、現状を作る少し前を知らなければならぬ。その少し前をまた知る。そのことで現状を把握できる。それで始めて延長としての将来計画を考える、ということをやらざるを得ない。将来構想をやるうとする時に、技術屋は現状を理解できるころまで遡つていくことがどうしても必要になつてきます。そのことが唯一、技術屋が問いかげられていくことに答える方法だろうという気がしています。

編集部 住民の意識が**「もの」**の存在意味を問い始めた、というのは、ある意味で技術者にとって救いではありませんか。

宮村 救いですよ。ただ本来は内部からその問いかげが出てこなければいけないのに、外部からこられて右往左往している状況です。しかしその問いかげは大事

なことなのです。たまたま、経済の力がなくなってきたところで、技術屋が考えるいいチャンスなんです。これをのがしてしまつたら、政治的、行政的対応のレベルだけになって考えることが遠のいてしまうかも知れない。技術屋が今でも最新のことを考える、時代にマッチしたことを考える、といいますが、外部からいわれて仕方なく考えさせられているわけで、おごりがあつたら原点に帰れないですね。近代的なものというのは、そこで吟味しなさいといわれて、無理矢理受験勉強やらされているようなものです。そういうのも外部からの問いかけと同時に要請もでてくる。我々を傲慢にさせないような時間的にゆとりをもたせて考えさせるといふ、そういうものがないと心身症になってしまいます。

親水計画への危惧

編集部 現在のプロムナード計画や親水計画についても、そのような感じですか。

宮村 心身症一歩手前だと思いますよ。何が親水かという検討がないでしょう。**編集部** ただ、親水計画というのは「も」に人を近づける効果はあるのではないですか。解決策ではないが、人に「も」を考えるチャンスを作るのではないですか。

宮村 四十年代後半から五十年代にかけての凄いい勢いで「も」と人が離れてしまった。興奮した土木屋にストップをかけることがなかったんですよ。その時に何でも良いからとにかくストップをかけることが必要だった。その後、辛か不幸かストップをかけることができた。ところがストップをかけるのと同じ手段でその後もやられるのは困る。プロムナードはストップをかける手段だった。自然保護も強烈にストップをかけました。しかし、自然保護もプロムナードも逆の目玉になる可能性もあるのです。ストップをかける手段とその先というのはちがってよい。そういう意味では親水計画は、まだストップをかける手段であつて皆同じものをやればよいというものではないはずです。

固有名詞か普通名詞か

親水とは何か、水辺とは何か、と問う時に大きな問題が残ってるんです。固有名詞がついている川か、普通名詞の川として扱うのかという問題です。普通名詞の川でやれば、どこでも同じものを作つてしまうことになるのです。そうなるとうつと見渡した時に、どこの河川敷もほこりっぽくて児童公園を延長してきたような水辺ばかりになってしまいます。ほんとうはそうではないはずなんです。本

来ならその川と人がどういつながりて生きてきたのか、固有名詞のついた川に戻らなければいけないわけです。隅田川は河原のない川なのですが多摩川のように河原で成り立っている川とは、つきあいがちがう。河相がちがい住んでいる人の顔もちがう。同じ遊びをしてもしょうがない。多摩川でサケを放流したから隅田川でも、というのは賃成しない。あの時代にカムバック・サーモンで、ストップをかける手段ではあつたが、皆同じというのでは危惧を感じます。

四——蛇口文化の中の川

宮村 隅田川で座談会をしている時に、小学生の子どもに「君たちの飲み水はどこからくるのか」と聞いたら「蛇口から」と答えたのが僕にとっては大変なショックだったんですが、蛇口文化がどことんまでゆき渡つてきて、蛇口の向こうに人がいるとは全然思わない。子どもにまで徹底し始めた。そういう機能分化した都市の中で川を考えたら、ますます機能分化するだけなんです。機能分化のひとつの手段として親水計画を考えているわけですね。水辺空間もそうですし、下水も公園もそうです。機能分化がいかに我々をおかしな方向へ動かしているのか、という現状認識をきちんとしないと、大

変なことになる。単目的の機能としては高いが、全体的な面からはまずいといったものがある。手術は成功したけれど患者は死んだ、ということほどにでも起きてくるわけです。下水は成功したけれど川は死んだ、ということも起きるかもしれない。評価の基準まで機能分化してしまっている。

そういう中で川を考えるというのは並大抵のことではない。僕は、一時何もしないことが必要だと思つている。凍結がいいか悪いかわからないが、最低限将来に可能性を残す工事以外はやらない、工事をやる場合につめない、わからない部分はわからないまま残す、ということを考えてほしいと思つています。

将来に可能性を残す

編集部 都市計画で大切なことは地面の可能性、つまり地域の個性として持っている可能性を残すことではないかと思つています。手をつけるということは、何かを実現するために別の可能性を消してしまふことでもあるわけです。ですからできるだけ将来の可能性を残しながら、今の目的を成就する、ということに気をつけることが必要だし、ますますそういうことが要求されるようになったのではないかと、思います。

宮村 川の機能を考えてみても、今まで

は治水と利水だった。そこに親水機能を加えようという発想は、機能分化の発想で僕はこわいと思うんです。川は時代によって使い方はいろいろある。東京でも横浜でもこんなに道路が混んでくると水路というのは見直されるかもしれない。舟の方が速くて便利になるかもしれない。市街地内の水路などは一隻のだるま船でトラック二百台分ぐらい運んでしまいうわけで、経済効果は抜群です。そういうことがもう一度でてくるかもしれない。可能性というのはどうなるのかわからないところがあるので、その時代に気がつかなくても百年後にでてるかも知れない。だからわからないものに無理矢理機能をつける必要はないんです。不用河川という名前もいかに傲慢です。次のステップでは全然ちがうということが起こり得るのだから傲慢さをなくさないといけない。

たとえば、三十年代に親水とか河辺を残すというのは全然受け入れられなかった、今になったら急にそういうことをい出すわけで、隅田川の護岸が失敗だったと皆がいうようになった。時代、時代で考えろというのはいかに無責任です。ただ三全総までの時代というのは予測がつかなかった。人口が二億になるのか、東京が五千万になるのか。今後は三〇万人の新興都市がポコッとできるなど

ということはあり得ないわけで、ある程度予測が可能になってきた。先行を想定する項目が定まってきたのだから、この本質を考えるのにはいい時代で、土木屋は落ち着いて考えるべきだ。しかし考える時に、今までどういう発想でやってきたか、というきちっとした整理をしないと同じところへ落ち込んでしまう可能性はあります。

行政の住民教育

同時に住民の意識の方にも問題があります。というのは、行政が今までやってきたことは徹底して住民に浸透してしまっています。ここで行政だけがかわるうとしても無理で、今まではこれこれは悪かったということをいっても良い。その辺の勇気がない、自分たちが絶対間違いない、というのは傲慢さでしょう。やはり、それはいいわれないと自分の首を絞めていく。だから水害などで三日間同じ炊き出しを出したらメニューが同じでけしからんと文句がくる。役所も気の毒だと思いうけれどよく考えると行政自らが播いた種ですよ。ズボンをまくれば簡単に家に帰れるのにボートを用意しろ、とか。そんなのは水害ではないですよ。それなのにそういわれるのは絶対水害を起こしませんと今までいってきただけ。何でもやりますよ、と行ってきただけなん

ですよ。住民教育は自分のざん悔と一緒にやらざるを得ないですね。住民教育がこの頃流行ってきてますが、前提条件として自分たちの自己批判と一緒に教育するということがなければ出てこないですよ。それをやることによってもう一度川を考えると。

編集部

技術者の側からいえば今までやってきたことは時代の要請であつたわけで、自分たちだけ変わろうとしても変わりようがない。もっと広い範囲でお互いに良いものとはどういうものか、をきちんと考えていける環境を作っていくことが必要ですね。ただ、役人が本音をどこまで出せるか、あるいはわからないのだ、ということはいえるかどうかですね。

宮村 その前に本音を知っているかどうかというステップがある。今までの発想がどうだったか、という整理もできないというのには本音を知らないわけですよ。本音を知って、それを知らずためにどういう手段があるのかを考える。それこそ行政の技術ですよ。そういうことやらないと、たまたま今は金がないからよい金がでてきたらまた暴走しますよ。本音がまず知り、建前と本音をどうさばくかという話ができてその中に教育も入るわけですよ。

評価関数の転換

編集部 行政と住民のつき合い方を変えていくというチャンスなのかも知れませぬね。ただ、これだけ蛇口文化が徹底した中では大変難しいような気がします

宮村 希望がもてるところはなないわけはないんです。隅田川で上流の子供と下流の子供を交流させると、おもしろいのは下流の子が上流にいくと土を裸足で歩けないんです。上流の子を下に連れてくるとコンクリートの上を裸足で歩けない。気持ち悪いんです。全然異質の文化があるわけです。しかし一緒にキャンプするんです。何となく下流の子は一步上で上流の子はひげ目を感じている。それは生まれてから過疎だ過疎だといわれてグレードを低くされていた。ところが、夜になって虫が一匹いると都会の子が眠れないんです。大きざぎすると、上流の子がパツと取っておもむろに持って外へ出している。すると一斉に下流の子が尊敬の眼差でみる。かぶと虫をばつとつかまえて下流の子にやるとワイワイ大きざぎをしながら上流の子の自分たちにはない能力を認める。子どもの世界では異質の文化が共存できる。昔のような川をとれば、下流に都市があり中流に農村があり、上流に山村があり、それぞれ独立の

文化圏、経済圏があつて、従属関係ではない流域圏を作っていた。子供の世界にはそれがあるんですね。上の子は川を縦に描く、下の子は横に描きますね。それぞれの川をみることによって流域をつくる。子供が可能だということは大人でもつくれると思うんです。

従属関係でない関係を作るというのは、評価関数を変えればよいので、上流

下流のどっちが良い悪いの問題でもない。横浜の河川の場合は流域が小さいですからその中で可能ではないか、と思います。隅田川だから隅田川クラブが成立したんだ、といわれますが、隅田川だから大変だったんだよというんです。ひとつの区とか都とかではできないんです。

隅田川流域には七百万人住んでいるわけですから。横浜でも隅田川ほど悪くなら

ないうちにできますよ。年若い隅田川がもう一度自分の顔を洗ってみようとして始めた。横浜はまだ二〇歳か、いくつかわからないけれど、自分の体験によってはどういう顔にもなるわけです。ただ、基本的な顔、骨格とかは変えてはいけません。

編集部 まだまだ横浜の川には希望が持てますね。

宮村 そのとおりだと思います。

編集部 本日はお忙しいところありがとうございます。まだ、まだお伺いしたい点がありますが、紙面の都合もありますのでこれで終わりたいと思います。

△関東学院大学工学部

土木工学科助教 〆